

ムットーニ

裏蓋を開けると

私の作品を一言でいうなら「カラクリ・モーション・BOXシアター」とでもいうべきか。んん言葉では伝えにくい。いわゆる、機械仕掛けのミニシアターなのだ。だが、実は私は30歳のころまでは絵描きだった。それがなぜ、ある日突然機械仕掛けの作品をつくり出したか……。

20年前のある日、私は秋葉原のラジオセンターを訪れた。狭い迷路のように入り組んだ路地に、所狭しと並んだパーツ屋。そして店先に並べられた無数の見慣れない部品たち。

「これは、何だ！」

そして時折背後を行き交う人々から発せられる聞き慣れない言語。

「ここは、どこだ！」

見知らぬ場所で、困惑の中に一人取り残された私は、だがその反面、ある種の心地よさを覚えていた。ついこの間まで、棚に多くの絵の具や筆が並べられた画材屋に通っていた自分とのあまりに大きいギャップが、むしろ愉快でならなかった。大げさにいうなら「未知の領域」にいるのだった。私は1軒のパーツ屋で、親指の爪ほどの小さなスイッチらしきものを見つけ、それをつまみあげた。

「あの？ これは？」「マイクロスイッチ」と、素っ気ない返事。

「どうやって使うんですか？」「知らねえな」

どうやらこれは試練だな。かくして私の未知なる領域の制作活動が始まった。やがて作品としてのスタイルができあがったころ、一人の知人がアトリエを訪れた。メカに詳しい彼に、私は作品の裏蓋を開け、メカの核心部を見せた。すると彼は腕組みをし、「ムットー





表紙 ガリレオのノート

Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale, ms. Gal. 49, ff. 138v-139r. "reproduced by kind permission of the Ministero per i Beni e le Attività Culturali, Italy / Biblioteca Nazionale Centrale, Firenze"

"Envisioning Information" by Edward Rolf Tufte, published by Graphics Press Cheshire, CT, in 1990

C o n t e n t s

2 技術に会う 5

裏蓋を開けると ムットーニ

4 HITACHI FILE talk+

1[talk] 新しいインタフェースを生み出す、
「ヒューマンインタラクションラボ」の挑戦
望月有人

[+] ヒューマンインタラクションラボ発

2[talk] 企業の強みとしてのIT資産を継承する「作らない開発」
石田厚子

[+] 情報システム開発技術の展開

3[talk] コースからトップへ、
柏から世界へ通じる選手の育成を目指して
酒井直樹

[+] 柏レイソルU-12

10 特集 気象価値 天気予報で差をつける!

12 天気予報とは何か 気象と暮らしをつなぐもの 木村龍治

16 気象シミュレーション 数値予報のメカニズム

19 数値予報の進化を支える日立スーパーテクニカルサーバ「SR11000」

21 天気予報番組の舞台裏

NHK気象キャスター・平井信行さんに聞く

23 気象ビジネス最前線 天気予報で売り上げを伸ばせ!

26 technobscure 5 伊奈英次「FINAL WASTE」

28 永瀬唯のサイエンス・パースペクティブ 5

新幹線 超高速と環境との調和

33 ダントツさんが行く! 4

科学技術館 日立ブース「Nature Contact」

34 技術の日立・今昔 1

冷蔵庫

ムットーニ(武藤政彦).....1956年横浜生まれ。1979年創形美術学校研究科修了。1980年代半ばより「動く絵画」とでもいうべき「電動カラクリ・シアター」を発表。数十cmほどの箱の舞台上で、人形が音楽と光に合わせ一幕劇を演じる作品により、独自の世界を展開。NHK「美と出会う」の特集、テレビ東京「誰でもピカソ」のムットーニ劇場(12回)などにも出演。著作に、『ムットーニ不思議人形館』(工作舎)、『ムットーニスモ』(牛若丸)、CG絵本『ムットーニおはなしの小部屋』(平凡社)などがある。

二、これはたまたま確実に動いているだけ」。そしてさらに、「間違っではないけど、無駄なことをやりすぎだ」

その言葉を聞いたとき、私はある種の感動を覚えた。なぜならそれは、私自身の生き方そのものに対する言葉のように響いたからだ。そうなのだ、私はたまたま、だが確実に作家としての営みを続け、遠回りをしながらもなんとかたどり着こうとしている。この20年の間、私なりに反省と試行錯誤を繰り返し、そして破れかぶれと愛情で作品をつくってきた。

そして私なりの技術というものが確立されてきたのかもしれない。私が死んだ後、作品の裏蓋を開けた人は、彼と同じことを思うだろうか。

「たまたま確実に動いているだけ」

でもそれが自分自身なら、そんな技術があってもいい。

10年前に世田谷文学館に納めた3台の作品は、もう3万回以上動いているだろう。だが不思議なことに、いまだに壊れない。



SKYSCRAPER 2000
(写真 武藤政彦)